

糸魚川市駅北まちづくり会議 第3回実践会議 記録

日時	令和元年 11 月 11 日 (月) 18:30~21:00	会場	共場糸魚川コモンズ
進行	<p>1 開 会</p> <p>2 経過説明、参考資料説明</p> <p>3 講義 糸魚川ならではの資源と活用を考える ～暮らしの地産地消～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・NPO法人西湘をあそぶ会 代表理事 原 大祐 様 ・株式会社みかんぐみ 代表 竹内 昌義 様 <p>4 意見交換、協議</p> <p>5 その他、連絡事項</p>		
出席者	<p>日本料理鶴来家 専務取締役 青木資甫子</p> <p>リノベーションスクール@糸魚川 サブユニットマスター 五十嵐昌樹</p> <p>有限会社池原印刷所 代表取締役 池原寿子 (個店の魅力アップ女性の会 副会長)</p> <p>花重 磯貝 正子 (個店の魅力アップ女性の会 顧問)</p> <p>リノベーションスクール@糸魚川 サブユニットマスター 猪又直登</p> <p>ペンションクルー 代表 岩崎 智</p> <p>有限会社二葉デンキ商会 代表取締役 加藤 康太郎</p> <p>EKIKITA WORKS 幹事長 木島 嵩善</p> <p>加賀の井酒造株式会社 第18代蔵元 小林 大祐</p> <p>おもちゃ木のこ 代表 齊藤 里沙</p> <p>まちづくりらぼ 副代表 野村 祐太</p> <p>リノベーションスクール@糸魚川 ユニットB企画者 藤岡 あかね</p> <p>EKIKITA WORKS 代表 本間 寛道</p> <p>リノベーションスクール@糸魚川 ユニットA企画者 松木 美沙子</p> <p>個店の魅力アップ女性の会 会長 室川 亜紀</p> <p>外部アドバイザー 西村 浩 (座長)</p>		
会議概要	<p>1 開 会</p> <p>2 経過説明</p> <p>○前回からのふりかえり (事務局)</p> <p>テーマ、スケジュール資料説明</p> <p>3 講義 (概要)</p> <p>○NPO法人西湘をあそぶ会 代表理事 原 大祐 様</p> <p>自己紹介</p> <p>⇒平塚で育ち、隣の大磯町の高校に通っていた。卒業後、東京の大学に進学し、そのまま就職したが、高校時代に好きだった大磯の別荘地の風景がどんどんなくなっていくのをなんとかしたい、という思いから地域を再生する活動や仕事に携わるようになった。</p> <p>⇒西湘地域を遊び場として考えており、遊休地などを利活用して地域性を取り戻したいと思って活動を行っている。(楽しい大磯暮らし)</p> <p>大磯町での取り組み</p> <p>① 大磯市 (おおいそいち) の立ち上げ</p>		

大磯は、昔は宿場町・別荘地で栄えたが、高齢化の進行とともにベットタウンが衰退して、人口が流出して地方化している。

都心の郊外は地方化しているが、ベットタウンは均一化しているので、地方化はむしろ喜ばしいと思っている。

地方化の際に重要な要素は、自然や食・歴史であり、それが地域に残っていることである。

ローカライズの中心は、やはり「食」であると考え、最初に手掛けたのが漁協直営の食堂「めした大磯港」。開業後は取材も多くあり、毎日150人ほど＝初年度からおよそ5万人の集客があり、漁協の貴重な収入源となった。

その後、2010年から大磯市をスタートした。大磯市は「港をチャレンジの場とするインキュベーションの取り組み」。

出店はローカルで、個人で成り立つ形を基準として、第1回は関係者のみの19店舗だったが、その後は出店者の増加とともに来場者も増え1万人程度となった。

10年程度で200店舗近くとなり、神奈川県内で最大の朝市となった。

②空き店舗の活用

大磯市で出店している方たちが、空き店舗を活用して営業を行うようになっていく。一番人気のパン屋さんが入居することで、周辺の空き店舗にも雑貨屋やワインバルなどもできて、スモールエリアの価値が上がった。今まで店舗が所々なくなっていたが、そのエリアは徐々に店舗ができて盛り上がっている。

1階に森の幼稚園、3階にオーガニックカフェをつくって当初は課題を感じていたが、保育園の給食を請け負うことで営業が成り立つようになった。その後カフェはケータリングなので盛況となった。

少しずつコンテンツができたことで、雑誌にも取り上げられるようになり、エリアに来る人々も多くなっている。

③農園事業の活動

1次産業で成り立つことは難しいと思い、3次産業などでの農地再生を目指し、農地を借りて会員による活動を行っている。

地元の蒲鉾屋で地産商品を使って酒を造って販売したところ、初年度に爆発的に売れてしまった。近隣の酒造メーカーの製造を委託しているが、一番のヒット商品となり地域でも認知されている。

④二宮町の団地再生

里山を取り戻すことを団地再生の目的として、東京に通勤しなくても良い人々に住んでもらい、二宮町の豊かな暮らしを安く自分の空間に住んでもらっている。

空きスペースを活用することで、いろいろなどことで活動が生まれ、ここ数年で30代、40代が増えて人口も社会増加となった。

《まとめ》

地方こそチャンスと思っている。最近は美味しい食材があるローカルなレストランも増えている。

地域の食材は供給されていることが重要である。エコシステムを構築することで豊かな地域になる。

移住者は便利を求めているのではなく、豊かな暮らしを目指している。ITも発達しているので、東京にいる必要もなくなっている。

新しい里山をつくり上げる必要があり、地域ならではの豊かな暮らしが重要である。1次産業を大切にしないエリアにはチャンスはない。

まちのビジョンから逆算して課題解決を行うことが必要である。

○株式会社みかんぐみ 代表 竹内 昌義 様

自己紹介

⇒最近はいろいろな講演でエネルギーの話をしており、断熱男と呼ばれている。

⇒住宅の高断熱化によるエネルギーの使い方やエネルギーによる経済の循環などを研究している。

エネルギーの取組み

① 最近の環境関連の状況

最近では ESG 投資(財務情報だけでなく、環境(Environment)・社会(Social)・企業統治(Governance)要素も考慮した投資)など金融機関なども再生エネルギーの活用などを行っている企業など環境対策の要素を投資先の判断としている。

ドイツなどのヨーロッパでは二酸化炭素削減に積極的に取り組んでいるが、日本では対策が遅れている。

日本では3分の1は建物でエネルギーが使用されており、暖房と給湯で3分の1、残りは家電で使用している。

全体で26%削減目標があるが、建築関連はエネルギー使用量が増えており、今後40%の削減が必要となっている。

ドイツは対策が進んでおり、太陽光発電や風力発電、バイオマス発電など再生可能エネルギーの活用が進んでいる。

②地域の木を活用した循環システム

バイオマスは安定して使用できるのが利点である。日本の国土の3分の2は森林であり、木を活用したエネルギー対策が必要である。

ヨーロッパでは木で断熱性能がある住宅を建てている。

地域の木から住宅をつくり、製材の時に残った廃材をエネルギーに活用する循環システムを構築することで、地域にお金が循環するという仕組みが重要である。

例えば、岩手では年間800億円相当の米を作っているが、一方では800億円の化石燃料を使用している。これでは豊かにならない。糸魚川市でも、年間150億円のエネルギーを使用している。これが地域に残れば豊かになる。

③日本の住宅事情

日本の住宅は、断熱していないので寒い。断熱すると省エネルギーとなり、快適に

なる利点がある。

日本の住宅できちんと断熱されている住宅は全体の5%である。断熱性能が向上すると人体の疾患なども改善されるとのレポートも発表されている。

日本に断熱した住宅ができた時にデザイン性などに課題があったが、現在は窓の大きい住宅も可能であり断熱シミュレーションの費用も安くなっているため、低価格になっている。

④岩手県紫波町の事例

地元の工務店が地元の木を使用して住宅を建てるプロジェクトが取り組まれた。当初モデルハウスの建築時は高かったが、太陽光発電を使用すればゼロエネルギーの住宅レベルとなる。

紫波町では、ロコミが広がり57区画すべてが完売した。地元の工務店のシミュレーションがきちんとできていて、どのように安くできるか管理できたのが、うまくいった点である。

⑤その他

紫波町や他地域でもワークショップで断熱改修している事例も多くある。

小学校などでエアコンが設置されているのは良いが、断熱性能が著しく低い。

津山市で検証を行った。データはまだ少ないが、電力料は断熱した方が半分程度になる結果がでている。

簡単にできる対策として価格は高いが、断熱ブラインドもある。

黒部市では断熱改修の際に富山の木を使用した事例などもある。

《まとめ》

地元の木を使用してエコシステムを構築して、地元でお金を循環させることが重要である。

空き家も増えており、断熱性能がある住宅は少ないので今後は断熱改修が重要となる。

4 意見交換 ※部分筆記

(座長) 原さんの話を聞いて、これからやれることはあるか。

(委員) 「地産地消」は、実際「調理する側」になったら結構難しい。なるべく地元産の食材を買うようにしているが、県外の食材の方が安いのは事実。

農協の食彩館へ買い出しに行くタイミングがなかなか掴めない。

(講師) 食材を手に入れやすい環境づくりが大切。知り合いの酒造は、原材料であるお米の地産化に取り組んでいる。

(講師) 紫波町のマルシェは、農協からの補助金を一切もらっていない。地域の食材しか置けなくなると、品薄になる時があり、消費者のことを考えて安価な県外産の食材も置いているが、品質の良いものを選んで置いているため、お客さんからも支持されている。

(委員) どうして地産地消が良いのかを消費者の方にちゃんと伝えていくことが大切。

地元の生産者だからこそ出せる食材の味があり、それを調理して、消費者に知ってもらい、その生産者から食材を買ってもらうことが、私のやりたいことですし、これから大事なことだと思う。

(講師) 地域によっては食文化の中に入っていないため、まったく食べられていない美味しくて安価な食材がある。例えば我々の地域では「みかん」が町内で飽和している状態だが、他の地域に持っていくと売れる状況がある。未利用食材がお金になることは可能性としてはある。我々の地域では雑魚として扱われている「アブラッコ (オキヒイラギ)」も、食べられてはいなかったが、素揚げにして提供したところ大ヒットした。

(委員) 市内でペンションを営業しているが、お客さんに提供する魚料理のほとんどは地元でとれた魚や自分で釣った魚を使っている。そこを拘って営業しているのでお客様からも喜ばれている。

ホタルイカも拘っており、山間地域に住んでいる友人に渡すとワラビなど山菜になって返ってくる。糸魚川だからこそできる物々交換のようなキャッシュレスの習慣がある。

(座長) そういった人たちが関係性を持って、まちの中に姿が見えてくると、まちの雰囲気も変わってくるとともに、大磯市のような形に近づいてくるのではないか。

(講師) コミュニティの循環を上げると良い流れになるが、商売目的としたコミュニティにしてしまうと全体としてギスギスとしてしまう。

引っ越してきた人が心地良いコミュニティがあると、定住してくれると思う。なかなか可視化できないコミュニティの価値を見えるようにするのが重要。

(座長) 続いて後段の林業の話聞いて、糸魚川の住宅事情や豊富な森林資源を俯瞰してみに行ったときに、糸魚川でなにかできる可能性はあるか。

(委員) 森林資源の中で一番豊富な地元の「杉」を生かすため、商工会議所を母体に今年から取組が行われている。その中で地元工務店が地元材をどれくらい使っているか調べたところ、コスト重視で市外のケヤキ材を使っており、地元材は不評で使っていないとのこと。地元の杉を使って家を建てた場合と、使わなかった場合で地域課題を考えようということになり、概算したところ、およそ3億円はキャッシュアウトしているという結果になった。新築のみを対象として概算したため、改築等を含めれば3億円以上の経済効果が見込める。

(座長) 紫波町の「オガールプロジェクト」は産業化するに当たっていくつものハードルがあったが、やはりコストの問題は大きい。

(講師) コストの問題は大きい、「オガール」は家を建てるに当たっての補助金は一切ない。補助金に頼ってしまうと、補助金事業が終わった時点で流れも終わってしまう。

性能が良く、地元材を使用しているなど、知識経験を有する工務店がハウスメーカーに負けないような規制をかけるのが大切。それらを推奨していけば、消費者に受け入れられる住宅がちゃんと作れていく土壌があると最近感じている。また、デザインも重要で、デザインがダサいと誰もついてこない。若い感覚が必要。

5 その他、連絡事項

・部会の設置について（事務局）

今回のテーマにそった部会を設置。実践委員、会議来場者、識見者・実践者など希望する者で構成したい。

・にぎわいの拠点施設の検討について（事務局）

会議設置時にも説明している復興まちづくり計画のにぎわいの拠点について、今後の展開などを本会議で意見交換したい。実践会議において今後の駅北地区に必要な中身を踏まえ、にぎわいの拠点の方向性を検討したい。

会議の時期的には、第4回目終了以後の予定。

6 閉 会